

め奉るのはその標示である冠や帯を崇め奉るので、我を崇め奉るのではない。又我が着物が布衣草履をつけてゐるからと云つて侮るのは我を侮るのぢやない。この布衣草履を侮るのである。こゝに布衣草履とありますのは、支那で無位無官の人の着ます衣服履物であります。即ち無位無官であるから人がこれを卑しむので、自分を卑しむのではない。その持ち物、着物、肩書等、自分ではなくして、自分の身につけて居るものを侮つたり、尊んだりするので、奉られたからとて喜ぶに及ばないし、又卑められたからとて腹を立てるにも及ばないのであります。

金持と貧乏

これは何も服装や肩書ばかりではないので、金持が崇められ、貧乏人の侮られるのも、全く金の有る無しで、金を取り去つてしまへば自他平等、

有るから崇められ、無いから侮られる。これに就て面白い話が支那の「笑林廣記」といふ滑稽な話ばかり集めてある本の中に出て居りますが、それは或る處に金持がありまして、皆の者が崇め奉る中で、獨りこれを崇めない者がありますから、其の金持は非常に不快を感じまして、其の男に對し「お前は俺の金持であるといふ事を知らんのか。」といひますと、其の男は「お前の金持なのは知つて居るが、別に金持だからとて、俺に一文も呉れる譯ぢやないから崇め奉るにも及ばぬ」といひますから、「さうか、それでは俺の財産の半分を貴様にやつたらどうか。」といひますと、「半分貰へばお前と俺とは同等ぢやないか、何も崇め奉る必要はない。」「では俺の財産を全部貴様にやればどうだ」「皆な貰つてしまへば俺の方が金持だからお前の方からヘイ／＼して來るがよい」と申しました。これではどうしても崇め奉る必要がなくなります。實際金のある人間とない人間とは、外觀の

差で、その人の人格そのもの、上に就いて評價し得るものではないのであります。

舞台の俳優

例へてみれば俳優が芝居をして居りますのは、即ち芝居はその役に依つてその役の衣装を着けて、或は大名の衣装を着けて威張り、或は下郎の衣装を着けてへい／＼やつて居る。だがそれは衣装や役柄で威張つて居るのでありまして、上の俳優が下郎の役をして下の俳優が大名の役をする事がある。大名の着物を着てゐるから威張つて居るので、幕がしまつて樂屋に這入り其の衣装を脱いでしまへば大名になつた俳優が却つて下郎の役になつた俳優にへい／＼云ふこともある。人間の世の中も、丁度そんなもので、唯その人の衣装とか役柄で威張つたり、へい／＼いうたりして居るので、

これを裸にして見なければ其の人の本當の値打はわかるものではないのであります。たしか佐久間象山先生の語であつたと思ひますが「人、我を褒むれども一糸を加へず、人、我を毀れども一毫を減ぜず」といふのがあります。人が褒めたからと云つて、自分は少しも偉くなつた譯けではなく、人が毀つたからと云つて、自分は少しも減じた譯けではない。それは丁度背が高いといはれたからとて高くなつたのでもなく、低いと云はれたからとて低くなつたのではない。

晴れてよし曇りてもよし富士の山

もとの姿はかはらざりけり

で、自分の値打は少しも變るものではないのであります。然し人に褒められると喜び、人が侮ると腹を立てるのが人情であります。まっ裸になつた處の人格其の者に重さを置いて、外觀からする他の批判に心を動かす

べきではなく、他を見るにも亦扮装を脱して樂屋に入つた所に目を着けねばならぬのであります。

人生は一場の劇

この人間の世の中を芝居に喩へましたのに就いて「翁草」といふ本の中に面白い事を云つて居ります。人間の一生といふものは丁度芝居のやうなもので芝居は虚にして實である。而して人間の世の中は實にして虚であるといひ、更に人間の一生を喩へまして、丁度、同じ樂屋から出て来て芝居をして、又同じ樂屋に這入るやうなものであると申して居ります。これはまことに面白い譬喩で、人間の生れる前は誰彼の區別はない同じ樂屋の中に居るやうなもの、さて死んでしまへば、これ亦誰彼の區別もなく同じ樂屋に這つて行くので、蘇つて生の前を顧みれば茫々として知るべから

ず、望んで死の後を見ればこれ亦漠々として知ることが出来ない、まことに黒暗々たる鳥羽玉の闇の如き中に一點の光ありライフと名け、消えて跡なき人生と見られるので、オギャアといふ呱呱の一聲にこの世に生れ、五十年か七十年泣いて笑つて、悲劇をやつたり喜劇をやつたりして、ウンと死んでしまへば、誰も彼も一緒に焼けば灰、埋れば土となつて、美人だからとて香水の材料になる譯けでもなく、金持だからと云つて金脈になる譯けでもない。丁度樂屋から出て樂屋に入ると喩へられた如く、人生は一場の劇であります。

運命の問題

私はこの譬喩は面白い味があると思ひます。成程、人間の一生はさういふやうなものだが、然しもう一つ此處に考へさせられる事があります。そ

これは人間の一生が芝居のやうなものであるならば、誰でも良い役がしたいではないか。ところが芝居の配役といふものは幕の開く前から皆決つて居るので、幕が開いてから役を決めるのではありません。幕が開いてから配役をさめやうとすれば舞臺の上で喧嘩が起ります。芝居の配役が幕の開く前から決つて居るやうに、人間のこの世の運命といふものは生れる前から決つてゐるものがあるといふことを考へねばならんと思ふのであります。今日の世の中の人は何でも自由々と申しますけれども、どうしても自由にならないのは、誰の子に生れて來たいといふ事でありませぬ。人は如何に自由を求むるとも親を選ぶの自由なし」といふ諺のあります通り、俺は金持の子に生れやうと思つても生れられるものではなく、高位高官の家に生れやうと思つたからとて生れられるものではない。オギヤアと生れて「こんな親か」と悲觀しても仕方がないので、人間には自分の考へて如何んと

も出來ないものがあります。此の事を考への中に入れて置かないと、徒らに煩悶懊惱を増すばかりで仕方がありません。此の自分の考へて如何ともならないことを普通に運といひ、佛教では過去の宿業であると申して居ります。運といひ宿業といひ其の見方は違ひますが、共に自分の考へては如何とも爲し難い事があることを申すのであります。それでは「もう俺はかういふ家に生れて、かうやつて貧乏に暮すのも運か」「こんな事をやつて失敗するのも宿業か」と何事も運と宿業とて片附けてしまへば便利なやうであります。それでは世の中は沈滞して少しも進歩發達といふことはないやうになるのであります。學校の先生が生徒に向つて「貴様何故そんなに出來ないのか」といふと、「ハイ運で御座ります」警官が泥棒を捕へて「何故こんなことをするか」「ハイ宿業で御座ります」と片附けてしまふことになりませぬから、此處でもう一つ考へなければならん事があります。それは

何であるかと申しますと芝居の配役は成程、幕の開く前から決つて居りま
すけれども、良い役がついて仕損ふ俳優もあれば、悪い役が當つて、仕活
かして褒められる俳優もあります。「運は天にありと雖もこれを開くは腕に
ありして、自分の現在の境遇は過去の宿業の然らしむ處であつて致し方なし
とするも、これからの後の運命は自分の腕次第で開いて行くことが出来るの
であります。それでありますから、考へても如何とも爲し難き現在の役に
不平を言はず、將來に向つて爲し得る自己の力を磨いて、これをより善く
し、より完全にして行かうと前途に希望を持つて進んで行く處に人間の世
を渡つて行く道があるのであります。

因果の關係

清の康熙帝も云はれました通り、まことに「天地は一場の劇」で我等は

この宇宙の意匠、天地の脚色の中に生れては死ぬまでの間に一幕くくと
演じて行く一個の俳優のやうなもので、唯だ其の芝居と異なるのは芝居は看
客と俳優とは別であるが、現實の世の中では自分で芝居をして他に見られ
ると共に、他の芝居を又自分が見て俳優と看客とを兼ねて居るのでありま
す。

さて其の宇宙の意匠、天地の脚色といふものは、どんなに筋を運んで
居るかと申しますれば、そこには理想への進みが見られ、原因結果の動き
が現はれて居るのであります。佛教では此の因果關係を開幕以前たる過去
と、開幕中たる現在と、閉幕後たる未來とにかけて三世因果を説き「過去
の因を知らんと欲すれば現在の果を見よ」といひ、現在の結果は過去の業
因の然らしむる所で、如何とも爲難しと諦めさすと共に「未來の果を知ら
んと欲せば現在の因を見よ」と申して現在の行動には將來を善くするの可

能性ありと見て、過去は如何にあらうとも現在に於て仰いで天に恥ぢず、俯して地に恥ぢざる誠心誠意を以て其の配役を演じて行けば將來の運を開拓し得ると見ますので、此の生前死後に亘る三世因果のことは宗教の信仰に入つてお話しなさねばなりませんから、今は暫らくそれを別と致しましてこれを現在のみに見ましても、金持の家に生れたが爲めに身を放蕩に持ち崩して墮落してしまふ人もあり、貧乏な家に生れた爲めに奮發して成功して居る人もありますので、運は天にあつて過去は如何とも爲難しとも、之れを開くは腕にあつて將來を善くすることは出来るので、この將來を善くするべく進むことが宇宙の意匠に従ふ所以であるのでありますから運を頼らずして力を頼み、自らの藝を磨くことを第一とし、他から善いと云うたから、悪いというたからと云つて、それに上下せられて褒められたからと云つて威張り、誘われたからと云つて氣を腐らすには及ばないのであり

ます、先にも挙げました「筆疇」といふ本の中に、「辱の来るその人を見よ。彼れ若し君子なりせば彼の云ふことは是なり。何ぞ怒るを須ひん」向ふが人格の高い立派な人であるならば、向ふのいふ事はいゝのでありますから怒るに及ばない。「彼れ若し小人なれば彼のいふこと非なり、何ぞ怒るを須ひん」小人であつたら向ふのいふ事が間違つて居るのであるから別に怒る事はないと申して居ります。かくて超然として毀譽の上に立つて自己は自己の努むる所に勵むことが出来るのであります。話が大變岐路に入つたやうであります、尙ほ後の話とお考へ合せを願つて置きます。

第十二講

心魔の降伏

魔を降す者は先づ自心を降せ、
心伏すれば群魔退き聽く、
横を馭する者は、
先づ此氣を馭せ、
氣平かなれば外横侵さず。

魔者先降自心
心伏則群魔退聽
馭横者
先馭此氣
氣平則外横不侵

【參照】

耳目見聞は外賊たり、情欲意識は内賊たり、只是の主人翁、儘
不昧にして獨り中堂に坐せば、賊便ち化して家人と成る。

心魔の降伏

魔とは何ぞ

今日は直ちに本文に這入つてお話ししたいと思います。魔を降す者は先づ
自心を降せ、心伏すれば則群魔退き聽く、横を馭する者は、先づ此氣を
馭す、氣平かなれば則外横侵さず。して、この魔を降すといふ、魔といふ
字はもと梵語で、詳しくは魔羅といひ、障礙、即ち障りといふ意味であり
ます。我々の障りとなるべき眼に見へない一つの力を魔といひ、昔はこの
魔といふ考へ、英語でデーモン (Demon) と申しますものが、凡ての宗教
の源をなした主要の原因でありまして、いづれの國も其の原始時代には
われ／＼の免れ難い死ぬといふことも、病氣するといふことも、皆な眼に

見えない魔の力であると考へられて死ぬのを死魔、病氣するのは病魔の爲す業であると考へられて居つたのであります。かく初めは魔を外に見て居りましたが、人間の思想がだん／＼發達しますに従ひ、此魔を外にばかり見ませずして我々の精神の内に考へ及ぶやうになりました、正しきに就き道を求めんとする我々が心の障礙となるべきものをも魔と名付け、心魔とか、煩惱魔とか申すやうになりましたので、こゝに魔を降せと申しましたのは此心魔であり煩惱魔であります。

心内の戦争

此心魔降伏に就きましては、宋の時代に夾山無礙禪師といふお方の書かれた「降魔表」といふ有名な文章があります。それは此の心魔の降伏を戦争になぞらへて、魔軍を敵と見て之れを攻めに参ります。こゝに此文句の出

ましたのも恐らくはこの「降魔表」にヒントを得て來たのではないかと思ふのであります。其の「降魔表」は魔軍の總大將を俺が／＼といふ我見の山中に立ち籠り、その下に貪、貪り、瞋、瞋、腹立ち、痴、痴、即ち愚痴であります。この貪、瞋、痴の三軍を率ゐ、其の外に傲慢であるとか慳貪であるとかいふやうな將士もありまして、その勢八萬四千とあります。此魔軍に對しては、此方は體空を以て旗印とし、性空を遣はして之れを聽探するといふやうに我見を打ち破る空、即ち無我の銳鋒を以て、敵の貪に對しては慈悲、向ふの腹立ちに對しては此方は忍辱、辛抱、向ふの愚痴に對して此方は智慧、といふやうに配軍し、これ亦八萬四千の法門を以つてこれに當り、敵味方の混戦奮闘状態を叙し、終に摩訶般若即ち大智慧の一軍、驀直に突貫して、敵の總大將を捕へ之れを討ち取つて心内平穩に歸する狀況が書いてあるのであります。

實際我々の心の日常を點檢いたしましても、朝起きてから夜寝るまで、しばらくの小止みなく何時でも戦争を續けて居るやうなものでありまして、「あゝしようか」「かうしようか」「此方か」「彼方か」といろ／＼考へて常に強い方が勝ち、弱い方が負けて行くので、善い心が強いか、悪い心が強いのかで其の行爲は規定せられるので、善い心と悪い心との對立戦争は常に續けられて居るのであります、さてこの悪い方の總大將は何であるかといふと、先きの「降魔表」にもあります通り、あれが／＼といふ我見が本で、これから俺が可愛い、俺が憎いといふ考へも起り、それを契機として八萬四千の煩惱は起つて來るので、これを先づ自心を降せと申しましたので、これを降してしまへば何でもないのであります、これがなか／＼降伏しない。山岡鐵舟居士は非常に佛教に通じて居られた人でありましたが、或る時相國寺の荻野獨園禪師の處に行つて「佛法といふものは煎じつめれば無我

であると解しました」といられると、禪師は「さうか」と聞いて居られたが、いきなり如意を以て鐵舟の頭をビシヤリと毆りつけられたから鐵舟は憤然として「何をなさるか」と詰め寄ると、禪師は「フウン無我といふものは怒るものか」と云はれた、これには、さすがの鐵舟も閉口したといふ話がある。佛法は無我であると解つて居つても、それが自分のものとなつて本當に無我になり切るといふ事は難しい。この我見が取れてしまへばもう心は太平でありますから、心伏すれば則ち群魔退き聽く。此處に心といふ事は自分自身の我といふ迷ひの心で、この迷ひの心を皆降服してしまへば八萬四千の惡魔どもは皆な退いて本心の命令を聽くやうになると申すので、これをいたしますには關ヶ原戦争の勇士で、後に出家した鈴木正三といふ人が書きました「驢鞍橋」といふ本の中に、「洒落佛法、ぬけがら座禪では役に立たぬ、チット齒を食ひしばつて不動明王の火焰の中に端座されるやう

な命懸けの心を以つてやらねば眞の悟は開けるものでない」といふて居るのでありますが、今、心魔の降伏も亦此の如くにして終に群魔をして退いて命を聴かしむるに至るのであります。

心の手綱引き締めよ

次の文句は「横を馭する者は、先づ此氣を馭す。」この横といふ事は横といふ字で、邪、横着、横道等正しからざる道に行かんとするの心で、馭は馬を乗りこなすときの字でありますから、心の手綱を引き締めて横道に外れぬやうにするのであります、行、誠上人の歌に

ならばじな澤邊の蟹の横にのみ

行かば行かるゝ道はありとも

蟹は横に行くけれどもそんな事を人間が習つてはならんとの意味、又、

はりつたふ鼠の道も道なれど

誠の道ぞ人の行く道

と詠まれて居ります、此誠に悖るやうな横道に逸れんとする心の手綱を引締めて、これを正しく導くのが横を馭すで、「横を馭するには先づ此氣を馭せ」とありまして、此横に外れんとする心の起るといふ事は「克己銘」に「勝心横に發して擾々として齊しからず」とありまして、人に勝たうくとする心が自分の氣を焦立てて横しまな心が起る。此氣といふのは形もなく、眼に見えないが體の中に充ち満ちて外に現はれんとする血氣とか客氣とかいふものでありまして、この氣が立つから心が平かでないで、その氣を静めて平かにしてしまへば外から攪亂さんとする者が來ても横にそれるやうな心を起す事はないといふのであります。前の文句を無礙禪師の「降魔表」にヒントを得たといたしますと、此後の文句は宋の呂大臨といふ人の

「克己銘」にヒントを得たとも思はれますので、此克己銘といふ文章も亦人間の心の内の状態を戦争になぞらへて、「且つ戦ひ且つ徠る、私に勝ち慾を望げば昔は寇讎たり今は則ち臣僕」とあり、己れの私慾に打ち克つてしまへば志は大將となり、氣は卒徒即ち家來となつてしまふといふので、その意味を此處に簡單に現はして、氣が平かになれば外から横な心が入らんとしても侵すことは出来ないといふたのであります、更に參照に擧げました文句に就て申し上げることにいたします。

心の主人公

「耳目見聞は外賊たり、情欲意識は内賊たり、只是の主人翁、惺々不昧にして獨り中堂に坐せば、賊便ち化して家人と爲る。」とありまして、我々の心を亂して行きます賊は内と外とにある。外から来るのは、見たり聞いた

りする。眼耳鼻舌身の五官、これは悉く我が心を亂す敵となつて外から攻めて来る。されば見聞覺知を閉ざし、見もせず聞きもせねば心を亂す事はなにかといひますと、内から敵に内應する奴がある。それを「情慾意識は内賊たり。」と申したので、心の内に起る慳しい、欲しい、可愛い、憎い、これらは皆な内賊となつて心を惱まし、我が心は實に内外から敵を受けて居るのでありますけれども、本心といふ主人公これは先日も申しました心の本性で、中江藤樹先生に人が修養の道を訊いた時「日々良知の御主人公に御對面あれ」と云はれた心の奥の主人公、これに毎日お目にかゝつて居ればよいといふので、われ／＼の心はこの主人公が居らんものだから外から来る處の誘惑や、内から起る情欲に惱まされ、紛々擾々として居るのであります。「只此の主人公惺々不昧にして獨り中堂に坐せば」で、この主人公がハツキリとして少しも昧まされず心の奥の御座敷にチャンと座つて居られれば外

から来た誘惑も内に起つた慾望も皆なその家の人になつてしまつて、心のまゝに之れを使ふことが出来るやうになるものであります、ところが此主人公が時々御不在になるものですから、善い考へも起れば悪い考へも起る。

我が心池の水にこそ似たりけり

濁り澄む事の定めなければ

實に濁り澄むこと定めのないのが我が心であります。此御主人公御不在中にいろ／＼のことをやると、後から御歸宅になつて「あゝ悪かつた」と氣がつく、氣がつくと思へば、又お出ましになつてしまふ、それで濁り澄むので、この御主人は何時もチャンと我が心の内に置いておかねばなりません。前に挙げました鈴木正三が此ことを説いて、我々の心は辻堂のやうなものであると申して居ります、野中にある一つの辻堂、大名も兩宿りをするのもあれば、乞食も這入つて寝ることもあり、善い人も、悪い人も、共に此

辻堂へは這入る。何故誰でも這入るかといへば、それは辻堂には主人公がないからである。例へ九尺二間の家でも誰の家だといふやうに主人公が定まつて居れば無暗に這入る事は出来るものではないが、主人公がないから様々の慾望が起り誘惑が入り込む。本心といふ主人公を置いてさへ居れば間違ひはないのであります。

修養の三心

此本心をしつかり攫ひて行くといふことはむつかしいので、孟子も學問の要は「放心を求むるにあり」と申して、此自分の心から逃げ出した本心を求むるといふことが修養の最も大切な所で、これに就て、かういふ面白い話があります。或時烏尾得庵將軍と原坦山といふ近代の高僧が、或る人の送別會か何かで集つた折に坦山が、「この頃は大本心を落す奴がある」と

いはれますと、得庵が「落した奴があれば拾つた奴があらう」といひますと、坦山が「衲が拾つた」といひますから、得庵が「拾つたら落し主に返してやつたらよからう」坦山「今にまあ警察にでもゆつくり届けてやらうと思つて居る」といつて、大笑ひをしたといひますが、しかし本心を落してもそれに氣の附く者は少ないから、何時迄待つても落し主は届け出ないだらうと思はれます。若し我々が落したと氣が附けば其處に求める心が起るので、その心が起れば早や心中の主人公はお歸りになつて居るので、此本心と呼び起して行くといふ事が、我々の修養の道であります。此の修養の段階には三つありまして、第一に先づ悪いと氣が附く、これ本心がチラリと姿を現はしたので、これを發心といふ。この發心では悪かつたと氣が附いても、又御不在になつてしまふから、「あゝ悪かつた」、「あゝ悪かつた」又悪かつた。」悪かつたの連發になる。そこで第二に悪いと氣が附いた事

はどうしてもやらないといふ決心が要る。そんなら決心だけでいゝかといふとさうは行かない。この決心に三日決心、四日決心、五日目に又元に還つたといふやうなのがある。酒吞が二日酔をして「かう頭が痛くては困るもう酒を飲ひまい」と思つたのが發心であつて、少し頭が軽くなると、「二日酔には向ひ酒がいゝ」などと飲み出してこの發心が消える、そこを辛抱して飲まないときめたのが決心、それがしばらく経つて復た「我が禁酒やぶれ衣となりにけり、さあついでくれ、さあさしてくれ」と呑み出して折角の決心も駄目になる、そこを更に辛抱して酒は飲ひまい」と一と月二た月、半年、一年、さては五年十年と續けて行けば酒は飲みたくなくなる。「諸惡莫作」と行じても行く中に諸惡作られずなる」で、かく續けて行くのが第三の相續心、「習慣は第二の天性にして其の力天性に倍す」といひますやうに、本心が何時も、自分から離れなくなつた時、凡ての魔は

第十三講

天地と人生

第二十講

悉く命を聴き、外横も亦來り侵さるる状態となるのであります。

歲月もと長くして忙しき者、
自ら促る、

天地もと寛うして鄙しき者、

自ら隘くす、

風花雪月もと閒にして勞攘者、

自ら冗にす。

歲月本長而忙者自促、
天地本寬而鄙者自隘、
風花雪月本閒而勞攘者自冗。

〔參照〕

石火光中、長を争ひ、短を競ふ、幾何の光陰ぞ、蝸牛角上、
雌を較べ、雄を論ず、許大の世界ぞ。

天地と人生

悠久の歲月

前々回(ぜんぜんくわい)に人間(にんげん)の世(よ)の中(なか)を芝居(しばい)に喩(たと)へましてオギャア(おぎゃあ)の一聲(ひびこ)で幕(まく)が開(あ)き、
ウンと呼吸(いき)絶(た)えて幕(まく)が閉(し)まる、まことに一幕(ひとまく)の芝居(しばい)のやうなものであると申(まう)
しましたが、此(この)芝居(しばい)は一幕物(ひとまくもの)ではなく、われ／＼(われ／＼)が生(う)まれる前(まへ)にも、演出(えんしゅつ)せ
られ、われ／＼(われ／＼)が死(し)んでしまつても、まだ演(えん)じ續(つ)けられ、次(つ)ぎから次(つ)ぎへと
永(なが)く續(つ)いて居(ゐ)るので、遠(とほ)く人間(にんげん)が此(この)世(よ)に來(き)ました始(はじ)まりから、何(なん)十(じゅう)萬(まん)
年(ねん)何(なん)百(ひゃく)萬(まん)年(ねん)と數(かぞ)へられる昔(むかし)から續(つ)けられて、人間(にんげん)が終(しま)ひになる迄(まで)、これか
ら亦(また)何(なん)十(じゅう)萬(まん)年(ねん)何(なん)百(ひゃく)萬(まん)年(ねん)と打(う)ち續(つ)けられて行(ゆ)く芝居(しばい)であります。人間(にんげん)の芝居(しばい)
は左(さ)様(やう)に長(なが)いのであります、それよりも長(なが)いのは年(とし)月(つき)でこれ(こゝろ)は人間(にんげん)とい

ふものがこの世に出ます前から、又人間といふものの全くなくなる後に至りましても尙在るものは年と云ひ月といふ事でありませう。年月は太陽や地球さては月に關聯して計られるのでありますが、此月も此地球も、あの太陽も未だ無つた昔から、これが無くなつても續いて行くものは時間でありませう。時間は無限で、世界の出来る以前から時間があり、世界が潰れても時間といふものはあるのでありますから、これを無限と申します。此の長い無限の時間の中に僅かに五十年か七十年、せいゝ百年、三萬六千日位、生きて居るに過ぎないのが、われゝ人間で、参照の中に擧げましたやうに「石火光中」で、石と石と打ち合はした時、其處にピカリと火の光を見、それは東の間に出て東の間に消えてしまひます、この石火光中にも似たる短い間に「長を争ひ短を競ふ」で「幾何の光陰ぞ」と申してあります通り、此の永い年月の中に我々の生活といふものは實に僅かなものであり

ます。その僅かな中で長を争ひ短を競ふてヤレ權利だ、ヤレ義務だ、ソレ體面だ、ソレ利害だと忙しく送つて行くのであります。

眼を永遠に着けよ

實際今日は忙しい世の中でありまして、超特急と申しますか、スピード時代と申しますか、萬事忙しくやつて居りますが、何故かう忙しく考へなければならんか、何故この永い年月の中に悠々として暮す事が出来ず、かう忙しく送らねばならんのであるかといふと、我々といふものは生と生れるに始つて死ぬるに終る僅かに五十年百年の生命であるといふ事だけを考へて居りますから生て居る間に、これもしよう、あれもしよう、永い浮世に短い命であるから好き三昧をやつて行かうといふ刹那享樂主義や、生れた序でに、どうかかうか死ぬまで生きて行かうといふ、御座なり主義になつてしま

ふのであります。然しこの人間の體といふものは決して生れるに始まつて死ぬに終るといふやうな短いものではないのであります。これは科學的に申しましても、私達のこの體は父母から祖父母、祖父母から曾祖父母と遡つて参りますれば、遠い／＼昔の祖先から永い年月を経て現在の我が身となつたのであり、此我が身は亦子より孫へ、孫より曾孫となつて永遠に繼續せられて行くものであります。決して忽然として生れ、忽然として死んで行く利那的のものでなく、祖先より子孫へと傳はる永遠の中の一部分であるに外ならないのであります。其の間に於て儒教に於きましては、道德的因果を立てまして「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり」と申しまして祖先に悪い行ひがあると子孫に殃があり、善い行があるは慶があると繼續さして、これを現在一代に止めずして無限の時間に通ぜしめ、この現在の我れのみを見ず、子孫に對する影響を永遠に考慮せねば

ならぬ道を説き、佛教に於きましては、先きにも申しましたやうに過去、現在、未來の三世を通じて見て行くのであります。決して此五十年の生命にのみ着目して居るのではありません。

死生の感想

若し夫、佛教に於ける死生の觀想に至りましては微に入り細を穿つて居りますが、これを概括的に申しますれば自力聖道の各宗特に禪宗などに於きましては人間の生き死にを大海に寄せては返へす男波女波のやうなものであると見まして、波が寄せたからとて大海の水一滴を増さず、波が返したからとて一滴を減せぬ不増不減の大海に寄せては返す男波女波、しかも波を離れて水なく、水を離れて波なく、生死輪廻の波そのまゝに不増不減の水であるといひ、こゝに生死一如の妙諦を體得せしめんといたしますので

他力淨土の宗旨に於きましては人間の死を日の暮れるやうなものと見、日の暮れることは悲しいが幾時間か後には夜が明けるといふ信念があるから少しも悲まぬやうに今生の化縁盡き果て、死ぬといふことは悲しいが、佛を頼む一念に依つて未來は蓮花咲く極樂淨土があると謂ふ信念によつて安心し得るとしますので、其の説き方はいろ／＼ありますが、皆現在一世を見ず過去現在未來と三世を貫く永遠の時間を通じて此人生を見て居るのであります。それらは暫らく信仰の上の事と致しましても、現在に於ける我々の生活を考へて見ましても、今日の我々の受けて居る現代の文化といふものは、過去幾萬年の昔から我等の祖先が發明し創造し模倣して繼承して傳へて呉れたもので、今はその文化の恵みを受けて生活して居るのであります。既に其の祖先の恵みを受けてやつて居るので、今日のわれ／＼の生活は又長く後代に傳へられて參るのでありますから、この現在の文化を更に

より良くし、より完全にして次に來たるべき時代に引渡すといふ此永遠といふ事に目をつけて行きますならば、もし其の結果が現在一世に現はれなくても、永遠に効果あらしむることが出来るかと考へて、コセ／＼として、忙しさに騒ぎ廻るには及ばぬのであります。その事を本文に於きましては「歲月も長くして忙しき者、自ら促る」といひ、更に「天地も寛うして鄙き者、自ら隘くす」といふて居ります。促るといふのは醒醒としてこそつき廻るといふ意を現はしたので、長い浮世を自ら短くして居るやうなものであると申したのであります。

蝸牛角上の争ひ

更にもう一つの次の文句、即ち「天地も寛うして鄙者自ら隘くす」といふのは先きの時間的に對して空間的に申しましたので、時間が無限であるや

うに空間も亦無限大であります。この無限のひろくとした空間の中に、われ／＼の住んで居る世界は實に小さいので、宇宙の大から地球の小を見、其の小なる地球の上に境を劃し、領域を定めて相争ふばかりか、其の同じ領域の内でもヤレ階級だ、ヤレ黨派だと争ひ、其の階級の中、黨派の中でさへ尙ほ優劣を論じ勝敗を語る、まことに参照の文に「蝸牛角上、雌を較べ、雄を論ず、許大の世界ぞ」とありますやうに、われわれが日常生活に於て鶉の目、鷹の目に争ふ範圍は非常に小さいもので、許大の世界ぞと、冷評せらるる如く、どれ程大きいのか、全く蝸牛角の上で争つて居るやうなものでもあります。この蝸牛角上の争ひといふ事は莊子といふ書物に、蝸牛の角が二つありますが、その一つの方に蠻といふ國があり、今一つの方に觸といふ國があつて、この蠻と觸とが互に領域を争つて相戦ひ死屍累々といふやうな状況を呈したといふ有名な譬喩があります。これを蝸牛角上蠻

觸の争ひといひ、小さな所で人間がコセ／＼と争ふて居るのを諷刺したので、一軒の家の中でも夫婦喧嘩同業者間には仲間喧嘩、サラリーマンにも同僚間の睚み合ひ、まことに小さな事を争ふ事が多い。鄙者自ら隘くす、心の鄙しさものは、自分から世間を狭くして

世の中は四尺五寸となりけり

五尺の體置き處なし

と啣つに至りますので、この廣い天地を五尺の身體の置き處もないやうに狭めて居るのであります。

傘下天地寛し

雲居國師が若狭に居られて儕輩の嫉視で面白くない事が出来まして、其處を立ち退く時の詩に

三毒の生ずる時、双眼暗し。
衲僧行李只だ是くの如し。

萬縁脱する處、一心安し。
傘下杖頭、天地寛し。

といふのがあります。三毒といふのは前にも申しました貧瞋痴の三毒で、これが起る時には二つの眼が暗くなる程世の中が狭くなつて来る、これ等の三毒煩惱は何から起るかといへば佛教では皆は因縁に因つて生ずるといふ、今此因縁の道理を見極めてこれを脱却してしまへば一心は安し。「萬縁脱する處一心安し」ぢや、衲僧といふたのは自分のことと唯だこれ是くの如し、一蓋の傘、一本の杖で出て行つても天地は實に廣いといふのであります、それと同じやうなのは仙崖和尚が美濃で面白くないことがあつて出て行く時に

から傘をひろげて見れば天が下

身は濡るゝともみのはたのまじ

人間到る處に青山ありと、かう決めて行けば何もこせついで長短を争ふには及ばない。俺が俺がで蝸牛角上に争つて居るやうに小さな範圍に頭を入れ込み、これに没頭するから眼が暗くなるので。出頭して超然としてこれを見るならば天地は廣いのであります。「桃花流水窅然として去り、別に天地の人間にあらざるあり」で、コセ／＼した人間以外非常に廣い天地があるのであります。

天地の風流

彼の一休和尚と親交のあつた蝸川新左衛門親當の歌に

世の中は乗合ひ船の假住居

よし悪し共に名所舊蹟

と詠じて居ります。かう觀じ來りますれば毀譽褒貶共に名所舊蹟と見て超

然として心廣く世を渡つてゆけるのに、狭い所に頭を突く込むから自ら隘せまくするのであります。此意味は更に次ぎの「風花雪月とも閒かんにして勞攘らうじやう者もの自ら冗みだにす」とも關聯くわんれんして考へらるゝので先きにも申しました通り、天地の風光といふものは、何時でも風も花も雪も月も皆な我々の心を喜ばす處のもので、決してこせ／＼しては居らない、眞に悠々閑々たるものがあるのであります。それを勞攘と心せはしく駈け廻はる連中は、この趣味を解する事をも知らずに、此悠閑なる天地の風光を無駄にし花が咲いたからと云つて騒ぎ廻るかと思へば直に散り行くからと心を傷み、月が照り渡つたからとて喜ぶかと思へば隠れたからとて悲む、古人の詩に

春は百花あり、秋は月あり。
夏は涼風あり、冬は雪あり。
若し閒事の心頭に掛くるなくんば、

便ち是れ人間の好時節。

これを歌に作り變へまして

春は花、夏ほととぎす、秋もみぢ、

冬雪ありて樂しかりけり

と申して居りますが春夏秋冬、天地自然は樂しかるべき處の風光を示して居ります。人はこの自然の恩寵に浴しながら自らこれを冗にして居るのであります。されば西行法師も其の初めに於ては

なげけとて月やは物を思はする

かこち顔なる我が涙かな

と、月に悩みましたが、次第に修養を積みましては

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

厭ふとしても晴れぬものゆゑ

と、この月に對して別段のかこち語をいはなくりました。心、長閑にして天地に對して行けば、天地は廣いのであります。越後の良寛が死ぬ折に何か形身に云ひ遺される事はありませんか、と云ひますと

かたみとてなにのこすらん春は花

夏ほととぎす秋はもみぢ葉

と天地自然の風光は良寛が死んでも長へに遺されて居る。此悠久にしてしかも寛容な天地自然の風光を感得せずして、徒らにこれを冗にして心せはしく世を渡るの無風流は、又實に現代人を殺風景ならしむるものに外ならないのであります。

第十四講 處世と修養

歩を進むる處に、
便ち歩を退くことを思へば、
庶くは藩に觸るゝの禍を免れん、
手を着くるの時、
先づ手を放つを圖れば、
纔かに騎虎の危きを脱せん。

—(テキスト十四)—

進歩處

便思退步

庶免觸藩之禍

着手時

先圖放手

纔脫騎虎之危

【參照】

事窮り勢ひ盡るの人、常に其の初心をたづぬべし、功成り行
滿つるの士、其の末路を觀するを要す。

此の身常に間處に放在すれば、

榮辱得失、

誰れか能く我を差遣せん、

此の心常に靜中に安在すれば、

是非利害、

誰れか我を瞞昧せん。

—(テキスト十五)—

此身常放在間處、
榮辱得失、
誰能差遣我、
此心常安在靜中、
是非利害、
誰能瞞昧我、

【參照】

我れ榮を希はず、何ぞ利祿の香餌を憂へん、我れ進を競はず、何ぞ仕官の危機を畏れん。

處世と修養

最悪の場合を豫想せよ

先日来續いてお話し致しました菜根譚も、本日を以つて終講と致しますのでテキストの十四と十五とを合せて申上げる事に致します。

菜根譚は何が示されて居るかとお申しすと、處世と修養、即ち一方は世渡りの上の事で、他方は自分の身を修め心を養つて行く、此二つの方面が書かれて居るのであります。十四の方は處世、世渡りの法でありますし、十五の方は修養の法、心を修めて行く道が説かれて居るのであります。即ち十四の方は「歩を進むる處に、便ち歩を退くことを思へば、庶くは藩に觸るゝを免れん、手を着くるの時、先づ手を放つを圖れば、纔かに騎虎の

危きを脱せん」とありまして、自分が何事かを計つて進んで行く折に、歩を退く法も先づ最初から考へて行かなければならん。何事もトン／＼拍子に都合好く行くやうに考へて進んで行かずに、最悪の場合といふ事を豫想して懸らなければならぬことを申しましたので、これを考へずに進んで参りますと、大きな間違ひが出来て抜き差しならんやうになる。藩に觸るゝといふのは易に羗羊觸藩と申しまして枝のある大きな角を持つて居る羊が、藩即ちまがきの中に頭を突き込んで、出るに出不れず、行くに行かれない、二進も三進も行かんといふやうな状態に陥ることがあるものであります。このどうもかうもならない、抜き差しならん場合が羗羊觸藩でありますから、最初から最悪の場合を豫想して懸つて、角を藩の中に突き込まぬやうにして行けば、そこで一步を退いて、静かに其の後の計畫を立てる事が出来るのであります。次ぎの文句も亦その通りで、手を着くるとき、

即ち事を始めるの時に先づどういふ場合に手を放つて行くかといふ事を考へて行けと申すので、多くの人は手を着ける事ばかり考へて放つ事を考へないから行詰つてしまつても騎虎の勢ひ如何とも爲し難きに至るので、「隋書」に「大事既に去る、騎虎の勢ひ下る能はず」とありまして、大事件は既に過ぎ去つてしまつたが、虎に乗つたやうなもので何處に虎が走つて行くか解らず、さうかと云つて降りれば直ぐに虎に咬み殺されてしまふから下りることも出来ず、自分の行き先も解らず、盲滅法に進んで行かねばならぬやうな事になるのでありますから、手を着ける時先づ手を放つ時の事を用意して行きさへすれば此危険を免れることが出来るといふのであります。

始末といふこと

參照の文に「事窮り勢ひ蹙るの人、常に其の初心をたづぬべし」とあり
 ますやうに、羝羊觸藩とか、騎虎の勢ひとかで何ともならない事窮り勢ひ
 蹙つた場合に、先づ自分が始めに此計畫を立てた場合を顧み、手を放つ時、
 歩を退く時、何うするつもりであつたかを尋ねて見るがよい、これを尋ね
 て其の不用意に反省すればこの失敗は、直に將來の經驗となつて次の歩を
 進め手を着ける折の準備となるものであります。これと反對に「功成り行
 滿つるの士、其の末路を觀するを要す」で、充分成功して、これで大丈夫
 だと思つた時には、これから後どうなるかを考へて見ねばならんと申すの
 で、滿てる月は缺け、咲く花は散る。人間はこれで充分だと思つた時には油
 斷が出来て、末路に處して行く事を考へないものでありますから、始めに
 末の事を考へ、末に始めの事を忘れないやうにして行くといふ事が人間の
 世に處する上に一番必要な事であります。よく世間で「あの人は始末が悪

い」とか「あの人は始末がよい」とかいひます。が、此始末といふ字は面
 白い字で、始めと末と書いてあります、始めに末を考へ、末に始めを忘れ
 ないのが始末の善いので、嫁入りする時の始めに末始終の事を考へて見れ
 ば、盲滅法の戀愛にその身を誤る事もなく、又末になつて嫁入りした時の
 事を忘れなかつたら、夫婦喧嘩も餘り出来ない筈であります。然るに多く
 の人々は始めに末の事を考へず、末に始めの事を忘れてしまふから始末が
 悪いので、物を買ふ時に拂ふ時の事を考へたら却々ウツカリ買へないので
 あります。買ふ時には拂ふ時の事を考へず、現金の賣買にはさうでもあり
 ませんが、呉服屋などが品物を賣りに参ります。「奥さんこれは如何ですか」
 といふと「今お金の都合が悪いから」と躊躇する、それをすかさず「いや
 お勘定は何時でも宜しう御座います」と申しますと、「そんなら貰つて置き
 ませう」と買ひ取る事になります。しかしこれは決して呉れたのではない

ので、後にはきつと拂はなければならん。其の拂ふ時になつて、「あれを買はなかつたら良かつた」とか「あんまり勧めるものだから」とかと後で悔んでも役に立ちません。始めに末の事を考へ末に始めの事を忘れない、これが始末の善い人であります、狂歌師が

人毎に春はぶらつき、夏は暑さ、

秋はよい月、暮はまごつき

と詠みましたやうな春は花が咲いたからとてぶらつき、夏は暑いからと云つて怠り、秋に良い月だからとて浮かれて居つては暮れはまごつかざるを得ないので、「年中の心の花が暮に咲き」元旦の始めから年の末の準備をして行けば、暮にまごつくやうなことはない。これを人間の一生に通じても其の通りで始めに末の事を考へず末に始めの事を忘れないやうにして行かなければなりません。此始末といふことは實に世を渡つて行くの一番の基

であります。それを考へずに盲滅法に進んで行くと羝羊藩に觸るゝやうに角を垣の中に突込んで抜き差しならぬ苦しみやら、又虎に騎るの勢ひで止まるに止まれないやうな事になつてしまふものであるといふのが、この文の意味であります。

超然たる心境

次に十五は、専ら修養の上の事で「此の身、常に間處に放在すれば、榮辱得失、誰れか能く我を差遣せん、此の心、常に靜中に安在すれば、是非利害、誰れかよく我を瞞味せん」で、これはどういふ事であるかと云ひますと、一體我々の心に迷ひといふものが起るのは何であるかといふと、物を二つ以上に見るからで、若し一つであるならば迷ひといふことはないので、一本道には誰も迷はないが二つに岐れて居るから迷ひが生ずるので

ありますが、人間の世の中の事といひますと、皆な道が二つに分れて迷ふやうに出来て居ります。即ち善いといふ事があれば悪いといふ事があり、苦しいといふ事があれば楽しいといふ事がある。褒められるといふ事があれば謗られるといふ事がある、得るといふ事があれば損するといふ事がある。是といへば非、上といへば下、長といへば短、高といへば低と悉く相対的で更に根本的に申しますれば生れるといふ事があれば、死ぬといふ事があるといふやうな具合に、凡て二つ相対して居りますから、此方は善いが彼方が悪い。善い方に行きたいが、悪い方に行きたくないと心に迷ひが起るのでありますから、この相対的なもの、根本を尋ねて見れば、たゞこれ現相の上の差別で、悉く比較的事として大きいと云ひ小さいと云ひますけれども、その物自体が大きいのではなく小さいのでもないが、これを他の物と較べてあれよりも大きい、これよりも小さいとか云ふので、そ

の物の本體は絶対の價値があるものでありますから、この相対差別の現相に迷ふことなく、超然として絶対平等なる一如の境地に心を置いて行けば褒められるとか辱しめられるとかそんな事で迷ふやうな事はなく、この身を間處と、紛々擾々たる差別の境涯を離れ、この心を動搖起伏の世の相を越えたる静中に安在しますれば榮辱得失是非利害といふやうなことで、我を差遣と間違ひ誤られたり、瞞昧と瞞着せられたり、胡魔化せらるることはないので、こゝに間處といふのは繁閑に對する間ではなく絶対の處に心を置く事であり、静中といつたのも亦動靜の靜ではなく動靜を超越した所と見て一段と其の意味を深くするのであります。我々の修養はなか／＼其處までに行きません。榮辱利害、是非得失に心を動かし褒められたからとて喜び、謗られたからとて怒つて居るので、なか／＼間處に放任し、静中に安在することは出来ない。夢窓國師の歌に

雲よりも高き處に出て見よ

何とて月に障りやはある

とあります通り、月は皎々として天に高く、浮雲去來して明暗があるやうでありますが、雲の上に超然として居る月には何の障りもない、「風吹いて動かす天邊の月」人が謗らうが罵らうが更に關係する所はないのであります、それであるのに自分からそれに關係して行くものだから、自分が終に其の渦中に飛び込んでしまふのであります。

毀譽の渦中

「百喻經」——これはいろ／＼面白い譬喩が集めた御經であります——其の中に或處で友達が五六人寄つて一人の男の噂話をして居た。「彼奴は短氣で、怒りつぼくつて、亂暴で困る」といふ噂をしてゐるのを、其の當

人が聞いたから堪らない。直ぐに其處へ飛び込んで、「俺が何で怒りつぼい」「俺が何で短氣だ」「何で亂暴する」とそこら中の人を殴り倒したから、これまで半信半疑の人々も、成程これはこの人は噂の通りだといふ事が解つたといふ。世の中のことはいふので自分が超然として居ればこりづまに打ちはよせても岩が根に

おのれ碎けてかへるあだなみ

自ら意志を堅固にして儼として立つて居れば、波の如くに寄せる毀譽褒貶も仇波となつて消えて行くものであります。それに動かされて谷川の小石のやうに流れ／＼して自ら苦むので、正宗國師は

よしあしの葉を折敷いて夕涼み

といはれたやうに善惡を打破し去り、天桂和尚の

まゝよれ住めばこそあれ難波江の

よしといふともあしといふとも

と云はれたやうに毀譽に心を動かさなければ他に依つて我を胡魔化される事なく、靜かに自分の本心を保つて行くことが出来るのであります。

利 祿 の 香 餌

參照の文に「我れ榮を希はず、何ぞ利祿の香餌を憂へん、我れ進を競はず、何ぞ仕官の危機を畏れん」。榮達を求めるから、利祿の香餌に迷ひ「お前に何萬圓やるからかうしてくれ」「何十萬圓やるからあゝしてくれ」といはれると、それに乘つて身の破滅を招くやうなことになるので「榮を希ひ心がなかつたならば、香の高い餌を以つてつられても、それに釣られて行く事はない。又進を競はずで人と争ふてまで早く出世をしたいといふ心持がなかつたならば、別に仕官を求むるの要もなく、もし官吏になつても別

に上官のお髭の塵を拂はなければならん事もない。鹹らるゝことにビク／＼するやうもなく、人間、吏となる又風流と落ちつき拂つて仕事も出来るのに、榮を競ひ進を争ふものだから、自分から自分を蹴落して、終に人生の落伍者になるやうな苦しみを受けなければならんやうになるので、心を寛く持つて榮譽の上に超然として立つといふことが、自己修養の最も大切な所であるといたしますので、常に間處に身を置いて心を靜中に安んじて行くといふのは、この菜根譚全部を通じての修養の主旨であると思はれます。

菜 根 の 滋 味

菜根譚には多くの文句があり、其の文章も亦いろ／＼異つて居りますが、その要旨は處世と修養との二つの道を説き明したに外ならのであります。

す。引續いてお話し申し上げました菜根譚は、もと／＼菜葉や大根で餘りうまいものではなく、私の調理按排も頗る拙く、諸君の御口に合ひかねませうが、若し諸君が鹽辛ければ砂糖を、甘ければ鹽を入れて、鹽梅をよくして日常の食膳の上に供せられましたならば、其處に無限の滋味がありはしないかと思ふのであります。この菜根譚のいふ處は、頗る現代離れをして居るやうでありますが、現代離れの所、直に以て現代に一服の清涼味を送ることになれば、幸これに過ぎた事はないのであります。十四回に亘りまして長々とお話し致しました次第、謹んで御清聴を感謝してこのお話を終ります。

後講
第一 無執着の心境

風、疎竹より來り、
風、過ぎて、竹、聲を留めず、
雁、寒潭を渡りて、
雁、去つて、潭、影を留めず、
故に、君子、事、來つて心、始めて現はれ、
事、去つて、心、随つて空し。

風來疎竹、
 風過而竹不留聲、
 雁渡寒潭、
 雁去而潭不留影、
 故君子事來而心始現、
 事去而心隨空、

無執着の心境

無寒暑の公案

無執着の心境

禪宗の名高い公案に、「僧あり洞山に問ふ、寒暑到來如何に回過せん。」
 著さ寒さの出で來た折にどう逃げたらいかと聞いたのであります。洞山、こ
 れに答へて「何ぞ無寒暑の處に去らざる」暑さ寒さのない處に行けばい、
 ぢやないか、そんなない處があるか。僧は反問して「如何なるか、是れ無
 寒暑の處」と云ひますと、洞山は「寒の時には閑梨を寒殺し、熱の時には
 閑梨を熱殺す」閑梨と云ふのは詳しく申せば阿閑梨といふ、僧侶の尊稱で
 ありますから「お前さん」といふたやうなもので「寒い時にはお前を金輪
 際寒くして、暑い時にはお前を徹底的に暑くしてしまへばそれが無寒暑の

處だ」と云ふのであります。これは一つの公案として充分に研究せらるべきもので、こゝで私が解説することは困難であります。寒い暑いに囚はれてゐる間は、未だ真に無寒暑の處に到達する事の出来るものではない。此暑い寒いに執着するから暑くもあれば寒くもあるもので、この執着を拂つてしまへば、こゝに別な境地が開かれるといふのであります。

眠られぬ話

一體我々の執着といふものは何處から入り来るかと云ふと、外からと内からと二方面がある。外からは非常に誘惑される事で、自分の心が動かされて行くものである。昔、宋の國に蔡君謨といふ非常に髯の長い人がありました。或る時、神宗皇帝といふ天子の前に出ますと、「お前の髯は非常に長いが、寝る時に蒲團の中に入れて寝るか、出して寝るか」と訊かれました。

平生は何とも考へなかつたけれども、さてさう訊かれて見ると、どうも入れて寝るやうでもあり、出して寝るやうでもある、「一應考へまして」と答へてその晩になつて蒲團の中に入れて見ると、どうも邪魔になつて具合が悪い。出して見ると何んだか寝苦しい。そこで出したり入れたり、出したり入れたりして、たう／＼一晩中眠らなかつたといふ話があります。昨日迄は何とも思はなかつたものが人に云はれるとそれが氣になつて寝られない。これは外界からの刺戟に執着して心が動いたのであります。これと反対な話——これは新しい話であります。或る禪宗の和尚の處へ青年が参りまして、「私は不眠症といふのか、神経衰弱といふのか、どうも夜眠れなくつて困ります。何とかいゝ方法はありませんか」と云ひますと、和尚が「それはお前が何も骨折つて寝るに及ばん、眠れなかつたら寝なくてもいゝぢやないか。人生五十年といふが半分は寝て暮すやうなものだ。

それは睡いから已むを得ず寝るので、眠れないのを無理に寝る必要はない、それより寝ないと決めなさい、さうすれば五十年生きて居れば、百年生きて居る事になる。衲等は睡いから寝るので、眠れんものを無理に寝るには及ぶまい」と申しました。それを聽いて青年は「成程さうだ」と、その晩になりまして、もう今日は寝ない、寢床に這入つた處が、眠れないんだからと、机の前に座つてチャンとして居る。其の内に十二時になつても寝ない。一時を聞いても寝ない。二時を聞いても寝ない。寝ない寝ないとやつて居つて「オイッ」と起されたのが午前十時であつたといふ話があります。それは昨日迄は自分は眠られん眠られんと自分で自分を覺して居つたので、今、寝ない〜と決めて心がスツと定つて終ひに眠れてしまつたので、我々の心の動く事は、先きにいふたやうに外からも動けばその心を動かぬやうにして、何等の執着もせんやうにするといふのが本文の意味であります。

ます。

去 來 自 由

「風、疎竹より來り、風、過ぎて、竹、聲を留めず。雁、寒潭を渡りて、雁、去つて、潭、影を留めず。故に、君子、事、來つて心、始めて現はれ、事、去つて、心、随つて空して、風が疎らな竹を吹いて來ると、サラ〜と竹に聲があるが、風が吹き去つてしまへば竹にはその聲がなくなつてしまふ。雁が寒潭と澄み切つた水の上を飛び過ぎて行きますと雁の影がその水に映りますけれども、雁が去つてしまつた後はその水には影を留めませぬ。潭といふのは、水の非常に清く靜かに溜つてゐる處です。我々の心も亦この疎竹に風が吹いて來て後に聲を留めないやうに寒潭に雁が渡つてその影を留めざるやうに、來たれば來たるに任せ、去れば去るに任して少し

も之を留めず。即ちこの心の内に執着をして留めて置かないやうにせねばならぬのでありますのに、我々の心は様々の事に出遇ふ毎に一々それを心に留めて、そのもの去つても尙心の内に残して居るから、その爲めに自分の氣に入つたものは何時迄もこれを留めて置きたいといふ貪慾や、自分の氣に入らんものは映したくないとて瞋恚が起る。これを風來たれば風、雁來たれば雁と唯來たるに任せ去るに任せて置くといふやうにして始めて自由自在の境地が開かれるのであります。

明鏡の如き心

心を明鏡の如くにし花來たれば花現じ、鳥來たれば鳥現じ、來るに任せ、去るに任せて、少しも影を留めぬ、それをわれ／＼は影を留めて執着し行くものだからそこに迷ひが生ずるので、これは名高い話ですが原坦山和尚が

また若い時分、或る僧と共に東海道を行脚して居られた。それは丁度雨霽りて水溜りが出來て居る所に一人の女が飛び越すことも出來ず躊躇して居りますのを見兼ねて、坦山和尚はその女を抱いて渡してやつた。さうすると一方これを見た伴れの僧はどうも坦山怪しからん。出家の身として女を抱くとはこんなものと一緒に歩くのも嫌だと物も言はずに夕方になりましたので、宿に泊らうといたしますと、其の僧は「衲はお前のやうに女を抱くやうな墮落坊主と一緒に泊ることは嫌だ」といふと、坦山和尚は「衲はあの時に放してしまつたに未だお前は抱いて居つたのか」と云はれた。これは坦山の方が一枚上で、其の僧は女を抱いた／＼と執着して、雁去つて潭に影を留めず、風、過ぎて竹、聲を留めずとは行かなかつたのであります。それがなか／＼さう參らぬのが、われ／＼の心

思はじと思ふも物を思ふなり

思はじとだに思はじな君

その思はじとする心も忘れてしまつて、皎々として翳りなき鏡のやうにして行かなければならぬのであります。「故に君子は事來たれば心始めて現はる」で事來つて始めて對應するの心が現はれ、「事去つて心空し」でその事件が去つてしまつたら心も從つて空しうなつて行かねばならぬ。それに我々は事未だ來たらずして心先づ亂れ、事去つて心に尙ほ執着して居るので、明鏡の物に應ずるが如く事に對應して行きたいと思ふのであります。

心越禪師の心膽

東阜心越禪師といふ人は支那から日本に來られた高僧で、非常に膽力の座つた御方で、容易に驚くといふ事がないといふので、水戸黃門光圀が、或る時その心越禪師がどの位の心が定まつて居るかと試めさうとして、自

分の屋敷に招いて御馳走をして、大きな杯で酒を出し、今、禪師がその大杯を兩手に舉げて酒を飲まふとせられる一刹那に、次の間に大砲を準備して置いて、ズドンと一發打ち放つた。大抵の者ならば屹驚して杯を落すか、酒を零す所でありすが心越禪師は、その酒がピリツとも動かさず、グツト飲み乾して「有難く頂戴致しました」と平然として居られる。しかし、人を招いておいて隣の部屋で大砲を打つなぞといふことは失禮な事でありすから、光圀が「禪師、只今は失禮仕つた」と云はれると、禪師は「大砲は武門の慣ひ、別段御斟酌には及びません」といはれた、成程、武家で大砲を打つのは當然だから別段斟酌するには及びぬと云はれたのに不思議はない、さて返杯といふことになつて光圀は其の杯を取られた、今度は大砲を打ち出す心配も何もないから安心して飲まふとせらる一刹那に、禪師は腹の底から出るやうな聲で「ガアツ」と大喝せられた、光圀は不意に杯を取り

落して「禪師、何をなさる」といふと、禪師は「棒喝は禪家の慣ひ、別に御掛酌は仕りません」とやられた。棒を振廻したり喝と警覺するのは禪宗の常套手段だから別に掛酌は致しませんといはれたといふ有名な話があります。この禪師の態度は即ち事に當つて始めて心現はれ、事去つて心空しきものがあります。斯る境涯に至るならば、話は元へ返りますが著いの寒いものといふやうな所を通り越して無寒暑の處に到る、否、無寒暑どころではない、無生死の處に至り、生きる死ぬるを超越した所に心を落着けて行さるのであります、即ち來れば現じ、去れば影を留めず、寒暑を寒暑に任し、生死を生死に任す。さあ其處まで参りますと、心を鏡のやうにする、其の鏡といふことに執着することもなくならねばならぬのであります。

明鏡を打破せよ

昔、靈雲といふ和尚は、何時も心を鏡のやうにせよと教へて居られる、そこで或る僧が靈雲に向つて「絶點純清の時如何」ときいた、絶點純清とは心に一點の塵埃もなく明かな鏡のやうになつた時である、これに對して靈雲は「尙ほ是れ眞常の流注」と云はれた、眞常の流注とは未だ迷ひだといふことでありますから、これが迷ひと致したならば、何か別にこの上の事があるのかと「向上、更に事ありや」と問ひますと「有り」と答へられる、然らば「如何なるか是れ向上の事」と詰問しますと「明鏡を打破し來たれ我汝と相見せん」お前は心を鏡のやうに鏡のやうにとまた鏡を持つて居る、その鏡を打破つた處に天地と共に一つになるの境地が開かれるといふ、其處迄進んで來れば眞の悟りの境地に入ることが出来るのであらうと思ひますか、それまでに至らずとも、少くとも此の映るに任せ去るに任せ、鏡のやうな心にまでに進みたいものであります。

後 講

第二

有生の樂いうせい たのしみ

虚生の憂きよせい うれひ

天地、萬古あり、
此身、再び得ず、
人生、只だ百年、
此日、最も過ぎ易し、
幸に其間に生まるゝ者は、
有生の樂を知らざるべからず、
亦虚生の憂を懷かざるべからず、

天地有萬古
此身不再得
人生只百年
此日最易過
幸生其間者
不可不知有生之樂
亦不可不懷虚生之憂

有生の樂、虚生の憂

樂天か厭世か

凡そ人間の世の中の見方には昔から二つありまして、人の世は苦しみの海、涙の谷であるとする厭世觀と、花咲き鳥歌ふ樂しみの世の中であるといふ樂天觀とであります。この二つは何れを正しとすべきでせう。アメリカのウイリヤム・ゼームスといふ人は、其の著「プラグマチズム」の中で、厭世と云ひ樂天と云ふは、それは哲學者自身の性格から出るのであつて、世の中が樂しいといふ論議が立つてから樂天論が出たのではなく、世の中が厭ふべきものであるとの論理的組織から、厭世論が出来上つたのである。哲學者自身が世の中が厭ふべきものと見てから厭世論を組立て、樂し

いと見てから樂天論が主張せられたので、云はゞ哲學者自身の性格の反映に過ぎないと見て居ります。

世相は人心の反映

これと同じやうな意味を卑近に表現したのは戯文の「六々部集」の中に、古人春宵一刻價千金とめつたに高ければ、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり、されども春宵一刻に千金出して買ふたわけもなく、三分五厘に賣つてしまふ出來合の浮世もなし、いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るまゝのいひたい事、つまる所、善くも悪くもいひなり次第の浮世にて浮世の定めなきは人の心の定めなきなり。

とあるのは餘程面白いと思ひます。厭世、樂天は哲學者の性格から出て組織立てられませうとも、われ／＼の心は或る時は樂天に、或る時は厭世に

と、眞に以て定めなきものであります、一體人生は何う見たらよいのでせよ。

人生如是

或る人が人生の見方は丁度栗の實を食ふやうなものであるとて、面白い譬喩を示されました。それは美味いの中から食ふのと不味いの中から食ふのとで、一方の人は十なら十の栗の實を、十の中で一番うまいのから食ひ、九つの中の一番うまいの、八つの中の一番うまいの、七つの中の一番うまいのと、其の中の一番うまいのと食つて行くと皆な一番うまいのになる「あゝこの栗は美味かつた」といふも一つの食ひ方だが、今一人の人はさういふ食ひ方はしない。一番不味いの中から一番不味いの中から食つて行つて、終に「この栗は不味かつた」といふ。美味かつたといふても不味かつたと云ふて

も、實は同じ粟であるやうに、この人間の世の中を樂しと見ても、苦しと見ても、我等の前に展開せられたるものは是の如きの世の中であると申して居りましたが、これは餘程面白い譬喩だと思ひます。さて然らば其の前に展開せられたる世の中はといへば、「天地、萬古あり、此身、再び得ず、人生、只だ百年、此日最も過ぎ易し」で、我々の生れる前から天地は長へにあり、我々が死んでも天地は長へに残つて居る。その永い天地の中にこの身を托するは僅かに五十年か百年、然も再び生れ出る事は出来ないのでありますから、生れ得たといふ點から申しますれば盲龜が浮木に遇ふ如くと喩られてあります通り、盲目の龜が大海の中に波にゆられて居る一つの浮木の穴に都合よく頭を突込み得るやうなもので、突込まう／＼とするけれども、却々頭を入れる事が出来ない。それが漸く頭を入れ得たやうに人間の世に生れ出る事は實に遇ひ難きことで、更に喩へて天から糸を垂れて海底の針

の穴に透さんとするやうなものであるとも云はれて居るほど、人間の身に生れ出るといふ事は困難なものとせられて居ります。しかも生れ出て、どの位、居られるのであるかといふと、僅かに五十年か百年であつて、其の五十年か百年の日も過ぎ易いので、澤庵和尚が「一日再び晨なり難し」として

はかなしや思へば日々の別れかな

昨日の今日にまたもあはねば

といはれた如く、その日／＼が過ぎ去つて行つて、昨日の今日はもう再び遇ふことの出来るものではない。物質的なる西洋人は「時は金なり」と謂ふてこれを惜んで居りますが、金錢は使つた後も亦儲け出す事が出来るけれども、光陰は金錢以上で、「時は生命なり」と見て東洋人は「少年老ひ易く學成り難し、一寸の光陰、輕んずべからず」と教へて居ります。再び得

る事の出来ない人身、最も過ぎ易き人生であるから、「有生の樂しみを知らざるべからず、亦虚生の憂ひを懐かざるべからず」で、有生の樂しみといふのは人間に生れたといふ事の樂しみ、この得難き人身を受けたといふ喜びである。この樂しみを知らなければなりません。

人生の樂

この人身の貴重なる事を知るが道に入るの第一歩で、道元禪師は「人身受け難く、佛法遇ふこと稀なり、此身今生に度せずんば更に何れの生をか待たん」と訓示せられて居ります。昔、會津の保科侯が山崎闇齋に對し「人生で最も大きな樂しみは何であるか」と問はれました時に、闇齋は「私は三つの大きな樂しみがあります。第一には天地の間に生きとし生けるもの、多い中で萬物の靈長と稱せられ、物の道理を知る事の出来る人間に生れ

たといふ事が最も大いなる樂しみであります。その次に世の中には治亂がある、然るに今太平の世に生れて書を讀み道を學ぶ事が出来るのは是亦大いなる樂しみであります。第三には今の諸侯方、大名達は皆深宮の内に育てられて世の困苦を知らず。徒らに酒色に耽つて一生を亂費してしまふ。その中に貧賤に生れて人間の辛酸を嘗めて道を習ひ徳を養ふ事が出来るのはこの上もない樂しみである」といふた。これは殊に會津侯に對して諷刺の意味も含まれて居りますが、其の第一に人間に生れたといふ事を大なる樂しみといたして居ります。これが有生の樂みで、今は山崎闇齋の時代よりズツト進んだ現代の生活、文化の惠澤は昔の人の思ひも及ばざるほどに人生を便利にし、目を喜ばし、耳を樂しましむるものは、いやが上にも増して來て居ります。誰れが此人生を厭ふべしといはせませう。しかしかう見たゞけでは徒らに生を享樂するモダニズムの流弊に陥る、此に於て更に虚

生の憂ひを思はざるべからず」と警告したのであります。

生存の意義

虚生の憂ひと申すのは、この生存を虚しうしないやうに、無意義にならんやうにと心配して行かねばならぬことを申しますので、古人も「百年三萬六千日、蝴蝶夢中に空しく春を送る」と戒めましたやうに、唯だ百年三萬六千日が一生涯を夢の如くに送つて何と致します。此日過ぎ易し、此一日を冗にして何の日か、之れを補ひ得られやうと考へて常に虚生の憂を抱いて此生存を意義あらしむべく努めねばならぬのであります。即ち如何にすれば我が生存能率を尤も有効に發揮し得るかと考へて、一日も等閑にしないといふことが必要であります。

一日の行持

昔百丈大智禪師は既に老齡に達し、多くの弟子があるにも拘らず、自分て箒や塵取を持って毎日庭の掃除や、其他さまざまの勞務をせられる、よぼくとしてやつておられるのを弟子達が見るに見かねて「老師がおやりなさらなくとも弟子のうちにくらでもするものが居りますから何卒おやめ下さい」と云ふても「イヤ、これが衲の務ぢや」というて聞き入れられぬ、ソコで弟子達が庭掃除などを出来ないやうに、箒や塵取を隠してしまひました。禪師はその日も亦何時ものやうに掃除をしやうとして庭に出られたが、箒も塵取もないからそこで變な顔をして御居間の方丈に歸へられた。さて食事の時刻になつて「どうぞ御飯をおあがり下さい」と云ふと「衲は今日は飯は食はん」と言はれる。弟子が「何故おあがりになりません

か」とたづねると「衲はこの齡で何事も働くことが出来んから、せめてお前方の手助けに庭の掃除位をして居るのに、それをお前方は衲の爲めを思ふてか、思はずにか、箒も塵取りも隠してしまつて衲に仕事をさして呉れん」として「一日作すんば一日食はず」と云はれたといふ名高い話があります。今の人は一日作さずして一日食はず所が、一日作さずして三日分も食ふといふほど徒衣徒食が多いのであります。「一日作さずんば一日食はず」これこの生存を無意義ならしめざる一大教訓であります。

生の尊重

此生存を無意義ならしめないやうにするに就ては此身も亦粗末に取扱ふことが出来ぬ、盤珪禪師といふお方は、老齡になつて、毎日御飯をあがるのに分量を決めて、これは少し多いの、少し少いのと、一々分量を計つて

喫がるから、或る人が「そんなに分量をやかましくしてお喫がりになるのは、命が惜しさうでおかしいぢやありませんか」と云ひますと、「いや、さうではない、衲の命は粗末には出来ぬ。君子一日生されば一日世に利あり、無駄には死なれぬ」といはれたと申します。一日生くれば一日世を利するの覺悟これが最も大切で、古句に「磯までは海女も簀さる時雨かな」といふのがある、海女は海に飛込んで鮑を取るのが仕事である。その海女が時雨が降つて来たからとて別に簀を来てゆく必要はない、どうせ海に飛び込んで濡れるのである。しかし、海に飛び込んで鮑を取るのは自分の仕事である。仕事のためならば濡れるも厭はぬけれども、時雨が降つたからとて、無駄にこの體を濡すことは出来ない。「磯までは海女も簀さる時雨かな」、此處にこの自分の生存を意義あらしめ、仕事のため、道のためには生命は捨ててもかゝるが、無駄なことには一日も粗末にすることの出来ない

といふ、これは志士仁人が「生きて以て國家のためになるならば、則ち生き、死して以て不朽の名をなすべくんば則ち死せん、大丈夫眼中死生なし、唯だ道あるのみ」といふて生存の意義を充分に發揮せんとすると同じく處世の箴とすべきことと思はれます。それに、かういふ事は少しも考へずに唯だ無茶苦茶に有生の樂しみのみを追つて虚生の憂を懐かず、

世の中は貧ぢや有得ぢや苦ぢや樂ぢや

何んぢや彼んぢやて末は無茶苦茶

と、所謂醉生夢死して此再び受ける事の出来ない人生に於て、この日再び遇ふことの出来ない其の日々を無意義に送るといふことほど惜むべきはないのであります。道元禪師が

學人は必らず死ぬべきことを思ふべき道理は勿論なり、縦ひそのことをば思はずとも、暫く先づ光陰を徒らに過さじと思ひて無用のことを爲し

て徒らに時をすごさず、詮あることを爲して時をすごすべきなり。と云はれて居ります。

一日是れ終生

この一日一日を無駄にしないやうにしてこそ、生涯を無駄にしないことが出来るのであります。或る人が碁の名人の中川龜三郎に——何代目か先の人と思ひますが——「貴下は碁を打つ折にどう考へてお打になりますか」とたづねました時、「勝たうと思つて打てば石に無理が出来る。負けまいとすれば其處に我慢があつて石に矢張り無理が出来る。たゞ一目一目正しく打たう、間違ひなく打たうと思つて其の通りに、一目一目正しく打てた時はその碁に勝つた時である」と、いふたといふことであります。人生又實にかくの如して、一日一日を正しく間違ひなく送つて、やがて生涯を正しくし、此

生存を意義あらしめるやうに出来るので、これがこの人生を正しく間違ひなく涉つてゆく道であります。我々は有生の樂しみを味ひ、虚生の憂を懷き、享樂に流れず厭世に陥らず其の日々を有効に送らねばならぬと思ふのであります。

後 講
第三 性 天 心 地

性天澄徹すれば、
即ち饑えて喰ひ、渴して飲むも、
身心を康濟するにあらざるなし、
心地沈迷すれば、
縦ひ禪を談じ偈を演ずるとも、
總てこれ精魂を播弄す。

性天澄徹、
即饑喰渴飲、
無非康濟身心、
心地沈迷、
縱談禪演偈、
總是播弄精魂、

性天心地

三養生

古人が三養生の説を立て、人間には三つの養生といふ事がある。一つは身の養生、二つには心の養生、三つには身代の養生で、この三つは鼎の足のやうなもので身代が悪くなればそれを心配して心が悪くなる。心が悪くなるとそれが身體に影響するから身體が悪くなる、身體が悪くなつて病気になるると働けなくなるから身代が悪くなる。身代が悪くなれば心が悪くなり、心が悪くなれば身體が悪くなる、といふやうに循環して居るものであり、心が悪くなれば身體が悪くなる、といふやうに循環して居るものであると云はれた。まことに其の通りで、特に身と心とは切つても切れない相互關係を持つて居るのであるから其の身を樂にするといふ事は心を安んず

るといふ事とは離れることが出来ない。「性天澄徹すれば、即ち饑えて喰ひ、
渴して飲むも、身心を康濟するにあらざるなし」で、身心を康濟と安らけ
くするは別段美味を貪つて餉食するには及ばぬ。性天即ち心の本性を天と
喩へたので、澄はすむ、徹はとほるであるから、心の本来の性が澄み切つて
居れば唯だ饑えては食ひ、渴しては飲む。その儘に自己の身や心を康濟せ
しめるので、これに反して「心地沈迷すれば、縦ひ禪を談じ偈を演ずるも、
總てこれ精魂を播弄せん」で、前に性天としたからこゝには心地と受けて
心地沈迷、自分の心が沈み、迷つて居れば悟つたらしく禪を談じ、超越し
たやうな詩偈を演べて居つても、それは従らに精魂、精神や魂魄を弄ん
で居るに過ぎないものである。されば修養の法は従らに禪を談じ或は偈を
演べるといふやうな事ではない。直に此自己を識得し性天を徹して本来清
淨の心を顯現せしめるといふ方に向はねばならぬのであります。

身心康濟

昔江戸の谷中といふ所に六といふ乞食があつて、その者は食を近所に乞
ふて生活して居るのであるけれども、如何にも風流に到達して居つたと見
え、その六の死んだ後に、笠の裏にかういふ事が書いてあつたと「宮川舎
漫筆」といふ本に出て居ります。

一鉢は千家の飯、
夕は暖かなり草筵の裡、
空しからざれば遠く立たず、
人若し此六を問はば、
孤身幾回の秋ぞ、
夏は涼し橋下のながれ、
樂みなければ又愁ひなし、
明月、水中に浮ぶ。

と、又、
月さへも高きにすめばさはりあり

あきふしやすき草の小筵

と、この乞食生活の飢えて食ひ渴して飲む中にも、頗る身心を康済せるものがあることが見られます。この乞食の例は餘り極端といたしますれば王陽明先生の詩に

飢え來たれば飯を喫し、倦み來れば眠る。

只此の修行、玄更に玄なり。

世人に説與するも渾て信ぜず。

却つて身外より神仙を覓む。

といひまして飢え來たれば飯を喰ひ、倦み來れば眠るといふ任運派となる自由の境涯にある此の修行は、玄の又玄と口に言はれぬ幽遠なもので神仙の境は別に他にあるのではなく、此性天澄徹した所にあるのに、世の人々はそれを信ぜずして、此身の外に別に神仙の境ありとして探し求めて居ると申

しましたので、一體修行とか悟りとかいふことを別段のこののやうに考へて、殊更世間と異つたこととし之れを日常生活の外に置くが、決してさういふものではないのであります。

平常心是れ道

或る僧が趙州和尚に「如何なるか是れ道」と問うたに對し、「平常心是れ道」と答へられた。孔子も「道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらざるなり」と言はれて居ります。凡そ名人とか達人と謂はれる人は皆な其の道を平常心の上に體現せしめられて居るので、茶祖利休は或る人の茶道の極意を問ふに對し、

茶の湯とはたゞ湯を沸かし茶を立て、

のむばかりなるものと知るべし

と答へたといひ、歌道の達人、香川景樹に「歌はどういふ風にして作りま
すか」とたづねた時、「平常の見聞、悉く歌になる」と答へ、その時に門前
に豆腐屋が通つたのを「あれでも歌になりますか」と云ふと直に

門前に豆腐の御用聲すなり

おさん出て呼べ行きすぎぬ間に

と云はれたといふ話があります。或る處に禪宗の御寺が二軒並んで居つた。
その一方の方の小僧が、一體自坊の和尚さんと隣の和尚とどちらが偉いて
あらうかと考へて、一つ問答して試してやらうと云ふて隣の和尚の處に行
つて「如何なるか佛法」とやつた。さうするとその和尚は茶を飲んで居
たが「暫く待て」と云つて草履をはいて鍬を取つて畑に出て、鍬を打つ真
似をして「是れ即ち佛法なり」と云はれた。これを見て小僧は非常に感心
して、自坊へ歸つて「どうも隣の和尚は偉い」といひますから、和尚が「ど

うしたんだ」實は是々で問答をしに行つた處が、一寸待てと云つて草履を
はいて庭に出て畑に行つて鍬を打つ真似をして、これ即ち佛法なり、と云
はれた。誠に日常の行持の中に佛法を示めさせた平常心是れ道と感心した
と云ふと、和尚が「隣の和尚はそんなに出来ない奴か、もつと出来ると思
つてゐたが、お前が行つた時、和尚何して居つた」「へい茶を飲んで居りま
した」茶を飲んでゐるのを一寸待てと言ふのがおかしい、其の待つ間佛法
は何處へ行つた、茶を飲んで居ればそのまゝに、是佛法なりとやることが
出来ぬか、喫茶喫飯これ佛法、何れも態々草履をはいて庭に行くには及ば
ぬぢやないか」と云つたといふ話があります。

主人が悪い

これを日常の中に體現せず、別に悟りらしい禪の話をしたり、清けな偈

を演べた處が所謂心地沈迷して心に澄徹した所がなければ何の價値もない。「笑林廣記」の中に或る人が非常に風流振つた家を作りました間取りの具合といひ、庭のたゞずまひといひ、其の部屋の仕事といひ、悉く雅致のあるものばかり並べて、客を招ねいて「何か不風流なものはありませんかと誇り顔にいひますと客が「たゞ一つ御主人が……」といふたといふ話があります、如何に風流の眞似をしても主人が不風流では何んにもなりません。我々もその通り、外見で禪を語つても修養を談じても、其の心の主人公たる性天が澄徹せず、心地沈迷して居つては何の役にも立たぬので、心は一切の本、「心静かなれば身も亦涼し」で、心がさわめて居つて、やれ温泉場、やれ海水浴ぢやと云つてさわいで、扇風機ぢや、氷柱ぢやと列べ立てゝも決して心熱を拂ふことは出来ない。徒らに外に求めずして之れを内に求め、先づこの心を養つて此心地の沈迷をすくひ、此性天の澄

徹を期するのは菜根譚全體に亘つての教訓であります。
私の此講話も亦徒らに禪を談じ偈を演べて未だ心地の沈迷を脱却することが出来ないのであります、盛んに古人の格言や逸話を引用いたしましたから、これを契機として何等かの資料を日常修養の上にお見出し下さることが出来れば幸ひ實にこれに過ぎないのであります。

加藤咄堂先生著

大東出版社刊行

全釋菜根譚

四六判四七〇頁希裝函入
壹圓八十錢 送料十錢

菜根譚全篇三百五十七章悉くに懇切に註釋を施したるもの。放
送菜根譚講話數萬の讀者の熱烈なる要望によつて成る。「人よく
菜根を咬み得ば百事なるべし」と。此の書を味讀する時、處世
の要道、人生の歸趨は自ら體得し得る。咬みしめれば咬みしめ
る程味のある書。菜根譚講話を讀まれる方は、必ず本書を座右
にをきて永遠の心の糧とせられよ。

加藤咄堂先生著

四六判布裝函入三百十頁
一圓卅錢 送料十二錢

運命の解剖 吉凶禍福の原因調べ

昭和九年八月十五日一刷七千部
 昭和九年八月廿五日二刷三千部
 昭和九年八月廿六日三刷五千部
 昭和九年八月廿七日四刷三千部
 昭和九年九月一日五刷六千部
 昭和九年九月三日六刷三千部
 昭和九年九月十日七刷二千部
 昭和九年九月廿五日八刷二千部
 昭和九年十月十日九刷一千部
 昭和十年五月廿日十刷二千部
 昭和十年十月一日十一刷一千部
 昭和十一年四月十日十二刷二千部
 昭和十一年十月十五日十三刷一千部
 昭和十二年七月卅日十四刷二千部

昭和十三年十月十日印刷
昭和十三年十月十四日發行

戰時國策版

特價七十六錢
(外地定價八十三錢)

著者 加藤熊一郎

發行者 岩野眞雄

東京市芝區芝公園七號地十番

印刷所 日進舍

印刷者 長尾文雄

東京市芝區芝浦町二ノ三

東京市芝區芝公園七號地拾番

發行所 株式會社 大東出版社

振替東京一九四七一番
電話芝(43)三九四四番

戰時國策版

菜根譚講話 加藤咄堂著

三百頁 七十錢

死後はどうなる 加藤咄堂著

二百二十頁 七十錢

支那の男と女 後藤朝太郎著

現代支那の生活相 三百二十頁 七十六錢

日本精神文獻叢書 全十七卷

各一圓十錢 一時拂十八圓 内容見本進呈

日本年中行事講話 (文部省認定) 高橋川 臨風閣 著 一圓三十錢

戦争と信仰 加藤咄堂著 送 十四錢

コミンテルンは挑戦する 元ソ聯極東部員 高谷 覺 藏著 送 一圓五十錢

國際スパイ戦秘話 海軍少將 H.C. バイオーター 著 荒川 實 藏 譯 送 一圓三十錢

不老長生の秘訣 支那五千年の實證 後藤朝太郎著 送 一圓三十錢

如何に生くべきか 今野賢三著 送 一圓五十錢

天理教の解剖 中村古峽著 送 一圓三十錢

迷信に陥るまで 中村古峽著 送 一圓三十錢

運命の解剖 加藤咄堂著 送 一圓三十錢

これでも生きられる 有馬 農 相序 送 一圓三十錢

東京芝公園七ノ十 振替東京一九四七一 大東出版社

北支那總覽

北支の政治、地理、文化、資源、産業、交通、財政、金融、貿易、對外關係等あらゆる部門について論述す

東亞協會編著
專門十名家補筆

送 三圓八十錢
送 二圓二錢

支那哲學總論

漢籍を觀る思想を觀る

文學博士

徳富猪一郎
野哲人

送 一圓五十錢
送 十二錢

論語・大學・中庸

文理大教授

田中貢太郎著

送 一圓五十錢
送 十二錢

孟子・孝教

文學博士

内野台嶺著

送 一圓五十錢
送 十二錢

易とは何にか

文學博士

山口察常著

送 一圓五十錢
送 十二錢

易の根據と應用

易經全文觀釋と占筮の仕方

文學博士 山口察常著

送 四圓五十錢
送 廿二錢

老子

子

長谷川如是閑著

送 一圓五十錢
送 十二錢

莊子

子

室伏高信著

送 一圓五十錢
送 十二錢

近傳

習習

二松學會長 山田準夫著
文學博士 飯島忠夫著

送 一圓五十錢
送 十二錢

東京芝公園七ノ十 振替東京一九四七一 大東出版社

根本佛教概觀

文學博士

宇井伯壽著

送 六十錢

日本佛教發達概觀

文學博士

境野黃洋著

送 六十錢

佛教哲理の發達

大正大學教授

加藤精神著

送 六十錢

科學と宗教

理學博士

海野三朗著

送 六十錢

念佛生活の論理的

根據

本莊可宗著

送 六十錢

親鸞上人の念と神ら道

文學博士

曉鳥敏著

送 六十錢

佛教が要求する宗教

文學博士

宇野圓空著

送 一圓二十錢

指導原理としての佛敎學

文學博士

平井巽著

送 二圓五十錢

茶とその文化

醫學博士

諸岡存著

送 二圓三十錢

東京芝公園七ノ十 振替東京一九四七一 大東出版社

生活と一枚の宗教附・治らずに治つた私の経験

倉田百三著 送一圓三十錢

生死を超へる道

高光大船著 送一圓五十錢

皇室と佛教

文學博士 鷲尾順敬著 送一圓八十錢

日蓮門下高僧列傳

馬田行啓著 送二圓五十錢

佛教讀本

岡本かの子著 送一圓三十錢

佛を求めて觀無量壽經を語る

佐藤春夫著 送一圓八十錢

觀音經を語る附・法華經の精髓

岡本かの子著 送一圓六十錢

法然と親鸞の信仰一枚起請文と歎罪鈔

倉田百三著 送一圓八十錢

送放觀音經講話

大正大學 清水谷恭順著 送一圓二十錢

東京芝公園七ノ十 振替東京一九四七一 大東出版社

386
591



終

